様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １６ 日現在

機関番号：３２６８５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０２５３２

研究課題名（和文）対人評価場面における談話行動の日韓中対照研究

研究課題名（英文）Discourse behavior in interpersonal evaluation situation of Japanese, Korean and Chinese

研究代表者
金　庚芬（KIM, KYUNGBOON）

明星大学・人文学部・准教授

研究者番号：５０５１３８９２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では，日本，韓国，中国の母語話者同士の会話に見られる対人評価場面を取り上げ，そこに見られる会話の進め方や志向性を明らかにすることを目的とした．日本，韓国，中国で収集した会話60組（120名）をデータ化し，談話分析の手法で分析した．その結果，日本語の会話では外的基準に照らして評価をやりとりする他者認定の志向性が見られ，韓国語会話では，他者を自分と競い合う存在であり評価基準としてみなす他者比較認定を志向していた．それに対して，中国語会話では，評価の中身や基準を他者に求めない自己認定の志向性が見られた．また，やり取りにおける情報量，仲間意識の共有，相手の自己否定の成立においての異同が見られた．

研究成果の概要（英文）：In this study, we analyzed discourse behavior in interpersonal evaluation situation of Japanese, Korean and Chinese conversation, and clarified interaction in the conversation and the orientation seen in that interaction. We collected conversations of 60 pairs (120 people) in Japan, Korea and China, transcribed them and analyzed them using discourse analysis method. As a result, in Japanese conversation, there was a tendency to evaluate based on external criteria. And there was a tendency to evaluate compared with others based on external criteria in Korean conversation. On the other hand, in Chinese conversation, self-evaluation orientation was seen without asking the content and criteria of evaluation from others.

研究分野：社会言語学

キーワード：対人評価　日韓中　談話行動　志向性

１．研究開始当初の背景

相手の価値をどのように認め，それをどのように伝えるかという評価にまつわる言語行動は，対人関係に直接影響しており，また言語によって異なる傾向が表れる．これまでの研究では，主に肯定的評価の一つであるほめる言語行動に関する研究が英語圏をはじめとする様々な言語文化において行われてきた．代表者（金庚芬）は，その「ほめ」に注目し，日本語と韓国語の会話に見られるほめる言語行動の様々な側面を総合的に分析し，『日本語と韓国語の「ほめ」に関する対照研究』にまとめられた．一方，否定的な評価行動に注目し，分担者（関崎博紀）は，親しい日本人大学生によるその対象，表現方法，談話展開などを地道に分析した．さらに，日中対照言語学を専門とする分担者（趙海城）を加えた本研究グループは，研究の視野を広げ，日本語，韓国語，中国語を対象に，対人評価行動の全体像を究明するための研究の第１段階として，３つの言語の言語話者を対象に，アンケート及びインタビュー調査を行い，親疎別，場面別の肯定的・否定的評価行動の有無，その影響要因，また，それぞれの場面に用いられる評価語，表現方法を分析し，日韓中の類似点と相違点を明らかにしてきた．

２．研究の目的

これまでの研究をさらに発展させ，本研究では，日本，韓国，中国の母語話者同士の会話に見られる対人評価場面を取り上げ，その特徴を明らかにすることを目的とした．実際の会話において，会話者二人がどのような会話特有の表現を用い，相手とどのようなやり取りを行うかに注目し，そのダイナミックな談話行動を分析した．さらに，それらをすでに分析済みの評価行動の意識とその要因分析結果とを照らし合わせ，日韓中の母語話者の対人評価場面における談話行動の有り様を明らかにし，そこから見られる相手との対人関係を調整し，維持する際の志向性を探ることを試みた．

対人評価行動に，肯定的・否定的という双方向からアプローチし，さらに意識調査から実際の会話までを総合的に分析研究することは初めての試みであり，本研究の成果は，日韓中の対人関係調整の志向性への考察，異文化間コミュニケーション理解に一助となったと考える．

３．研究の方法

日本，韓国，中国の３か国で会話収集の調査を行った．会話収集の場所と時期は，韓国のソウルで 2015 年 8 月，中国の大連で 2015 年 12 月，日本の東京で 2015 年 12 月～2016 年 7 月である．会話は，各言語とも大学生を対象とし，親友関係にある同性の母語話者による二者間会話とした．事前に了解を得た協力者に指定の場所に来てもらい，そこでの約 20 分間の会話を録画録音し，各言語で男女 10 組ずつ，計 60 組（120 名）の会話データを収集した．

各組の会話協力者には，会話録画開始から約 10 分間，「最近，凝っていること，または得意な分野，成功談」について話してもらい，さらに 10 分間，「最近，面倒でやっていないこと，または，苦手な分野，失敗談」について話してもらった．なお，話題は，会話の流れ次第で自然に他のものに移行しても構わないと書面で指示した．

会話終了後，会話データの妥当性と分析結果の信頼性を裏付けるため，二次的データとしてフォローアップアンケートを行った．そこでは，会話協力者の背景的情報や，会話自体に関する感想，相手との親しさの度合いなどを確認し，また，会話中の評価場面を振り返ってもらい，その時の意識，意図などを確認した．録画録音した会話は，それぞれの言語で文字化し，韓国語と中国語は日本語にも翻訳した．

４．研究成果

本研究の成果として，まず，日本語，韓国語，中国語の会話データ６０組分を全て文字化し，研究の基礎データとしてまとめたことをあげられる．条件を統一した日韓中の会話を文字化原則に従い，言語データとして整備することは，大変時間と労力のかかる作業ではあるが，今後の談話研究にも応用できる貴重な資料作りである．会話を録音のみならず，録画する意義は，単なる録音データより，言語データ化をより正確に行うことができ，また，本研究を発展させ，行う予定である非言語行動，異文化接触場面の分析も視野に入れていることにある．

次に，分析においては，収集した会話を，話題の開始方法，聞き手の反応，話し手の発話に含まれる情報の量や質など，進行時の相互行為の観点から，談話分析の手法で分析した．分析により明らかになった，肯定的評価・否定的評価場面における３言語の談話行動の傾向を以下にまとめる．

①　肯定的評価場面における談話行動

自己肯定的な評価表出場面を，話題の種類，開始方法，聞き手の反応，話し手の発話に含まれる情報の量や質など，進行時の相互行為の観点から，談話分析の手法で分析した．まず，指定の話題が出現した会話数を見ると，「最近凝っている・はまっていること」は，各言語 20 組のうち，日本 18 組，韓国 20 組，中国 20 組で見られた．次に「得意な分野・詳しく知っていること」は，日本 17 組，韓国 12 組，中国 16 組で，「成功談」は，日本 10 組，韓国 10 組，中国 13 組で話された．話

の展開によっては，10 分間で凝っていること・はまっていることのみが話されていた．その具体的な話題は，アルバイトやドラマ，ゲーム，俳優，異性などの日常的なものが大半で，互いの興味や会話収集時の状況などによる．この話題での会話の展開は，日本，韓国，中国で大きく変わらなかったが，それは自らの得意分野や成功談ほどには，会話参加者間の等位性に影響がないことが一因である．一方，「得意分野や詳しく知っていること」，「成功談」では，評価を相手と共有するか否か，評価の根拠をどこに求めるかなどにおいて日韓中で違いが見られた．まず，日本語母語話者は，自らの得意分野や成功談を展開する際，評価を受けた実績や，話者以外のヒト，モノ，コトによる外的な基準を満たしていることなど，根拠をやりとりしていた．これにより，「得意」や「成功」が，相互に了解可能となっている．次に，韓国語でも日本語と同じく評価の基準を外に求め，その基準に基づく評価が行われていたが，日本語と異なり，第三者と比較する傾向がより多く見られた．これは，客観的な基準で評価されうる事柄も，それに関連する何かに比べ，より良い，優っていると判断した時に初めて評価されることの表れと解釈できる．また，韓国語で成功談を話す際，成功したい，成功しなければ，などの願望，意志を表すやり取りが見られた．一方，中国語母語話者は，日本語と韓国語のように評価の根拠を外（他者）に求めようとせず，自分の評価基準や理屈で評価する例が複数見られた．すなわち，自身の基準に基づく自己肯定的評価が，相互に了解されていると理解できる．以上のように，自らの得意分野や成功談の談話展開とそこから読み取れる志向性を分析した結果，まず日本語の会話では外的基準に照らして評価をやりとりする他者認定の志向性が見られた．このような他者認定の傾向は，韓国語会話にも見られたが，日本語とは若干異なり，他者を自分と競い合う存在であり，評価基準としてみなす他者比較認定を志向していた．それに対して，中国語会話では，評価の中身や基準を外，すなわち他者に求めない，自己認定の志向性が見られた．

②否定的評価場面における談話行動

日韓中ともに「得意分野や成功談」に関する話題はなかなか積極的に現れず，別の話題に移る傾向が強い一方，苦手なことや後回しにしている事柄を躊躇なく挙げていた．しかし，その後の会話の展開では，自己否定的な話題で進行する会話での話の進め方，及び，そこから読み取れる志向性において各言語の異同が見られた．まず，日本語の会話では，片方の会話参加者が，自己否定的な発話，評価を行った後，その背景や類例などが，もう片方の参加者による相づち的な発話や同調的発話，理解表示の発話，繰り返しや確認，言い換えなどによる評価の共有を経て小出しに提示され，詳細が徐々に展開されていく例が複数抽出された．一方，日本語での進め方と異なり，韓国語と中国語の会話では，何がいつからどうして苦手なのかというような詳細な情報が当初から提示され，自己否定的な評価を述べる側の発話量が初めから多くなる例が複数見られていた．ただし，その後の展開は韓中両言語でやや異なっており，韓国語では，互いに自己否定的な事柄とその理由，類例などを交代で提示していく例が多く見られた．会話者同士は，苦手なことや失敗談を開示し合い，同じ経験から共有できる感情や相手から助言，提案をもらえる安心感が伝わるやり取りを好んで行なっていた．研究者らの先行研究でも，韓国語では同情や共感などの感情の表現が多く，仲間・共有意識を表す表現が見られると言及しているが，類似した傾向がここでも現れていた．次に，中国語では，相手の失敗を一般的な問題の一種とし，相手の自己否定を，部分的に否定したり，問題を限定的にしようとするやりとりも繰り返し観察された．参加者が相手の自己否定の根拠を全般的または部分的に否定する，限定的に捉える，反例を挙げる，一般論を述べるなどして，相手の自己否定的な評価を正しながら，あるいは打ち消しながら会話を進める例が，中国語の会話から複数確認された．否定的評価場面の分析結果，日本語の会話では，片方の話者による自己否定的な評価が，もう片方の話者による評価の繰り返しや確認，同調的発話や，相づち詞を用いた発話促進の発話を経て，徐々に背景や類例などが開示されていた．一方，会話展開においては類似していた韓国語と中国語であるが，韓国語話者は，同じ失敗を開示し合い，仲間意識を共有し，相手に助言してもらう安心感を表していたのに対し，中国語話者は，相手の自己否定が成立しないように，問題を限定的にしたり一般論を積極的に述べたりして，親身になって考え，相手の自尊心を傷つけないように努めていることが分かった．

以上の分析により示唆された各言語での会話の進め方や志向性における異同をより明確にし，さらに対人評価場面における会話展開の分析を進めていきたい．

５．主な発表論文等

（研究代表者，研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

①<u>金庚芬・関崎博紀・趙海城</u>「日本・韓国・中国の自己否定的な評価表出場面における会話展開に関する一考察」，『社会言語科学会第 39 回研究大会発表論文集』, pp.90-93, 2017 年，査読有

②<u>金庚芬・関崎博紀・趙海城</u>「自らの得意分野と成功談をどのように展開するか -日韓中の談話から-」，『韓国日本語学会第 36 回国際学術発表大会予稿集』，pp.139-144，2017

年，査読有

〔学会発表〕（計２件）
①金庚芬・関崎博紀・趙海城「日本・韓国・中国の自己否定的な評価表出場面における会話展開に関する一考察」，『社会言語科学会第 39 回研究大会，2017 年，東京・日本
②金庚芬・関崎博紀・趙海城「自らの得意分野と成功談をどのように展開するか -日韓中の談話から-」，『韓国日本語学会第 36 回国際学術発表大会，2017 年，ソウル・韓国

〔その他〕
①金庚芬・関崎博紀・趙海城『日本語・韓国語・中国語談話集』，2018 年

６．研究組織

(1)研究代表者
金庚芬（KIM，KYUNGBOON）
明星大学・人文学部・准教授
研究者番号：50513892

(2)研究分担者
関崎博紀（SEKIZAKI，HIRONORI）
筑波大学・人文社会系・助教
研究者番号： 30512850

趙海城（ZHAO，HAICHENG）
明星大学・人文学部・准教授
研究者番号：90595084

(3)研究協力者
姜錫祐（KANG，SUKWOO 韓国カトリック大学）
國生和美（KOKUSHO，KAZUMI 韓国東國大学）
金志姫（KIM，JEEHI 韓国カトリック大学）
邢文柱（XING，WENZHU 中国大連海事大学）
張清怡（ZHANG，QINGYI 中国大連海事大学）
張正義（ZHANG，ZHENGYI 中国大連海事大学）
趙英恩（CHO，YOUNGEUN 東京大学大学院）
蒋剣波（JIANG，JIANBO ハオアカデミー）